

甲子園の異邦人

金賛汀



甲子園の異邦人

金 賛 汀

講談社

●著者略歴

1937年に京都に生まれ、1963年に朝鮮大学政経学部を卒業する。

著書に『ぼくもう我慢できないよ(正・続)』(一光社)『朝鮮人女工のうた』(岩波新書)『抵抗詩人尹東柱の死』(朝日新聞社)『浮島丸釜山港へ向かわず』(講談社)などがある。

甲子園の異邦人

1985年5月28日 第1刷発行

著者——^{キム チャン ジョン}金 賛 汀

定価——1300円

装幀——海保 透

© Kim Chanjong 1985, Printed in Japan



発行者——野間惟道

発行所——株式会社講談社

東京都文京区音羽2丁目12-21 〒112

☎ 03-945-1111(大代表)

印刷所——慶昌堂印刷株式会社

製本所——藤沢製本株式会社

●——落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。送料小社負担にてお取替えます。

ISBN4-06-202064-5 (0) (学2)

目次

第一章——甲子園、一九八一年夏 7

本名出場選手たち 9

大観衆の喚声 15

コンプレックス 17

第二章——七人の球児たち 23

青春の輝ける一ページ 25

同胞選手で忘年会 28

一貫した民族心 39

第三章——甲子園の異邦人 49

全日本中等学校野球大会 51

唯一の朝鮮人チーム 54

不幸な時代の熱戦 59

第四章——京都商業の四人 63

百五十人の新入部員 65

約束 74

最後のチャンス 83

第五章——報徳学園の三人 99

野球少年 101

夏の甲子園への起爆剤	110
猛練習	122

第六章——出会い

129

父の不安	131
------	-----

吊いのホームラン	138
----------	-----

たくさんの激励	154
---------	-----

第七章——決勝戦

163

試合前夜	165
------	-----

逆転の報徳、耐えの京商	173
-------------	-----

勝利の瞬間	184
-------	-----

第八章——故国の土 189

両親の喜び 191

初めて会う親戚 198

肌で感じる違和感 211

第九章——それぞれの未来へ 225

進路の選択 227

人間としての尊厳 240

明日に向かって 253

あとがき 255

甲子園の異邦人

第一章——甲子園、一九八一年夏

本名出場選手たち

阪神電車で甲子園駅を降りると球場に向かう人の波がうねるように続く。その人波に身をゆだね駅前の広場に出ると、目の前に麦わら帽子を持った「おぼちゃん」が突然飛び出すようにして、前に立ちほだかり「お兄さん日射病にやられるがな。ほら五百円！」と叫ぶようにして麦わら帽子を押しつける。ああ、観戦用に麦わら帽子も必要だなあと、ポケットから五百円硬貨を取り出し、「おぼちゃん」に渡す。すばやく硬貨を受け取ったおぼちゃんはもう次の客を物色していた。駅前広場を球場に向かって歩くと、広場のあちこちに売店が並び、そこでも麦わら帽子を売っている。見ると価格は三百円とついている。

「しまった！」と思ったが、もう後の祭り。手に持った麦わら帽子をいまいましげに見つめながら、お上りさんよろしく、きよろきよろして歩いていた私に目をつけ、麦わら帽子を売りつけた「おぼちゃん」の抜け目なさに驚嘆しつつ、自分の頼馬さかげんとんまに苦笑いが湧わき上がった。一九八四年、夏の甲子園高校野球の見物はこのようにして始まった。

年来の友人、朝日新聞社のO氏に「高校野球を甲子園で取材したいのだが、新聞社の取材用の

リボン、借用できないだろうか」と尋ねたのは一九八四年八月、甲子園で夏の高校野球が始まった日だった。O氏はびっくりして「え？ 高校野球？ 何でまた金さんが？」とただ驚きという表情である。O氏から見て私は高校野球とは無縁の人間であつたからであらう。事実、野球は学生時代、遊ぶ程度にしかで、ときどき子供たちとプロ野球のテレビ中継を見るぐらいの関心しか持っていない。その私が突然、甲子園の高校野球を取材したいといい出したのだからO氏の驚きも当然である。

しかし、私が「ほら、八一年の夏の大会の決勝戦、あの時、出場していた京都商業の韓と鄭という選手、記憶しているかい」

「ああ、あの本名出場選手のことか……」

O氏はすべてを理解した。在日朝鮮人問題を核にして取材を続けていく延長線上に、甲子園出場の在日朝鮮人高校選手の話は、書かなければならないテーマの一つでもあつたからである。

八四年になって八一年の夏の甲子園大会にこだわつたのは、八一年の京都商業の選手の中に何人かの在日朝鮮人選手がいて、そのうち二人の本名出場の選手がいたことである。一人は韓裕。ポジションは左翼手。もう一人は鄭昭相。やはり外野手で中堅を守っていた。

八一年の夏の甲子園大会が始まってしばらくした日、野球が好きで夏休み中、毎日のようにテレ

ビ観戦をしている中学生の娘が興奮したような声で、

「アボジ（お父さん）、京都商業の選手に朝鮮の子が二人もいるよ」

という。その時、どうして朝鮮の子とわかったのかという疑問のようなものが私の表情に浮かんだのだろう。そんな表情をすばやく読んだ娘は、

「だってスコアボードに韓、鄭て書き出されているのよ」

え？　と思った。甲子園出場選手の中に在日朝鮮人生徒が少なくないことは前から聞き知っていたが、本名で出場する選手がいるとは思っていなかった。

あわててテレビの前に座り込み、試合を見た。いや試合よりも、スコアボードが映し出されるのを待った。

試合が次の回に進む。選手の交替の短い時間、スコアボードが映し出され、そこに京都商業の選手名が浮き出た。

五番・韓、七番・鄭という文字が鮮やかに脳裏に焼きついた。

うーんと唸る（うな）ように黙ってテレビを見続けながら、これは何を意味するのだろうかと考えていた。日本の野球界に在日朝鮮人選手が多いことは隠然たる事実である。

高校野球が戦前の中等学校野球といわれた時代から多くの朝鮮人の名選手を輩出しており、日本プロ野球界にも球史上に名の残る名選手を多数送り出し、現在も五十人は下らないという現役

選手が活躍している。

その中には日本プロ野球で日本最初のパーフェクト試合の達成者であり、通算勝率・通算シーズン最高防御率をいまだに破られることなく保持している李八竜（日本名・藤本英雄）がおり、日本プロ野球の記録をことごとく塗り変え、通算四百勝と三振奪取四千四百九十個などの大記録をうち立てた金田正一（朝鮮名・金慶弘）投手がいる。

さらに打者としては、パ・リーグで首位打者のタイトルを七回、十七シーズンの通算打率三割二分二厘（ちなみに、あの王貞治選手は三割三厘）の大記録を持つ張勲（通名・張本勲）選手がいた。

日本球界不出世の英雄たちである。

このような名選手たちも球場で本名を名のってプレーをしたことは一度としてない。

戦後、高校野球が始まり、多くの球児たちが甲子園に夢をかけて各地に熱戦譜を繰り広げた。そんな地方予選の段階でも、京都商業の二人の選手が本名で出場する以前に本名で出場していた例はなかった。いや、あったのかも知れないが、そのような事実を知る人はいなかった。

しかし、高校野球が国民的な行事として熱狂的な応援を受け各地で繰り広げられている時、その熱戦に参加している選手たちはヒーローであり、その熱戦譜が人々の話題になる。そして在日同胞社会では、それらのヒーローのうち誰々は同胞だという話題がよく噂（うわさ）になったものである。

日本社会の中で、制度的に社会的に抑圧と差別を感じている在日朝鮮人たちにとって、日本の

国民的行事の中で同じ同胞選手が活躍するのがうれしくもあり、痛快であったからであろう。それは野球が好きだとか、ゲームとして楽しんでいるという感情とは全然、違ったところの感情である。

すでに十数年前の話であるが、私が盆休みに石川県の田舎に帰った時、亡父が一人でテレビを見ていた。何を見ているのかなとのぞいて見ると、何と高校野球である。石川県の代表校が出場しているの、郷土的な関心から見ているのかとも思ったが、野球のルールも知らない父が不思議に思い「野球、好きだったの？ アボジ」と聞くと、父はちょっとはにかんだように「……いや……あのな、あのピッチャーというのか、あの子な、金沢の朝鮮の子だって」という。聞いてみると同胞の間からそんな話が流れてきたのでテレビを見て応援していたのだという。父は野球を応援しているのでなく、朝鮮の子が頑張っているのを応援していたのである。

甲子園球場の中に、多くの在日朝鮮人選手がいることは隠れない事実であるが、自ら本名で出場し、朝鮮人であることが判明しても気持よくプレーできる社会的状況が日本にはなかった。

そんな中で京都商業に本名を名のる選手が、それも一人でなく二人も出現した。その時、その意味することの理解に私は混乱した。

日本人社会で在日朝鮮人に対する差別観が薄くなったのか？ あるいは日本の学校教育の中で朝鮮人が自らの本名を名のっていく正当な教育がなされ、その結果が現れたのか、そんなことを

考えていたが、民族差別問題や教育問題を日常的に扱っているジャーナリストの一人として、そんな状況下に日本の社会がないと理解していたために判断が混乱したのである。

もし、そうでないとするなら、何か特別の理由があつての本名なのだろうか、とすれば保守的な体質の強い球界で、本名が何かの障害になることはなかったのだろうか。そのような疑問や、理解を越える数々の状況をいろいろと想定しながらテレビに見入っていた。

京都商業に二人の同胞選手が活躍していると知った後、京都商業を娘たちと一緒に応援した。京都商業が試合のたびにやっとなつと勝つという辛勝を繰り返しながら、決勝戦まで駒を進めていったのははらしなが見守り、喜んだものであった。

その決勝戦で兵庫県代表の報徳学園と当たることになったが、その時には京都商業には韓裕、鄭昭相という選手以外に、右翼手に金原貴義（本名・金貴義）と呉本治勇（本名・呉治勇）選手が活躍していることが判明していた。

さらに驚いたことに、対戦相手の報徳学園には投手で四番を打った金村義明（本名・金義明）、三塁手の高原広秀（本名・高広秀）、中堅手の岡部道明（朝鮮名・曹道明）の三選手が、在日同胞だといふことが在日朝鮮人の間には噂となって流れていた。

七人もの同胞球児が甲子園の決勝戦で相まみえるという快挙に同胞たち、特に関西の同胞たちは興奮し、試合を見守っていた。